

「私もスマホが欲しい。」

中学入学の時、私は母にお願いした。高校生になった姉が、この時買ってもらっていたからだ。返事は、

「高校生になったら。」

だった。姉が高校生で持てたものを中学から与えるわけにはいかないというのが理由だった。私は、納得がいかず、買ってほしいと要求し続けた。私がどうしてもスマートフォンが必要だと感じていたのは、思いついたときに調べたいことを検索でき、いくつもの情報を一度に得ることが出来る。そして、便利さと同じくらい友達とのコミュニケーションツールとしてだ。

何度も何度もスマートフォンが欲しいと要求する私に、母は「使用時間を守る約束が出来るのなら、買ってもいいよ。」と、言ってくれた。

そして、いざ、買ってもらえる状況になった時、私は、本当にスマホがいるのかを考えてみた。

コロナウイルス流行から三年、この間に私は、中学生になった。小学校の卒業式、中学校の入学式、初めて出会う友達、どの場面でも私たちは、マスクを着けていた。手指の消毒、接触を避けるようにと言われ続け、私たちは、他人との距離を意識し生活するようになった。マスク越しの互いの声は、聞き取りづらく、何気ない話をする機会も減った。しかし、スマートフォンを持っている友人はSNSでコミュニケーションをとっており、対面で話すことが減った日々の中でも自分の思いを伝えあっていた。感染症分類が第五類に移行し、マスクの着用は、個人の判断に委ねられるようになった。学

校でも先生たちは、流行前の日常に戻すべく、マスクを外している。私を含め、半数のクラスの友達も、体育、部活動の時以外は着用している。理由は、これまで着用してきた習慣と未だに感染したという話を身近に聞くからだ。コロナ前のようにしてもよいと言われるもその爪痕は、日常の至る所にあり、身近な人が感染したという話を聞いたたび、揺らされる自分がいた。

修学旅行で訪れた東京では、マスクを着けず、急ぎ足で歩いている多くの人を不思議な気持ちで見ていた。私が暮らす豊川より感染者数が多い東京のほうが、感染リスクは高いと思っていたからだ。その不思議な気持ちを誰もが感じたであろうに、私を含め友達が、旅行中、マスクを外した。ここに生活する人が、外しているのなら大丈夫なのかなと思ったからだ。

今回、修学旅行の写真には、マスクを外した皆の表情が写っている。何度も見返しては、楽しかった思い出が蘇る。と同時に、その表情から、距離がぐっと縮まった気がした。この三年間でいろんなものを覆っていたものが、マスクに象徴されているかのようなだった。コロナウイルスがどういうものかわからなかったとき、私たちは、少ない情報に大きく揺らされ、正しい判断が出来なかった。自粛警察が他人の行動を誹謗中傷し、風評被害もあった。ネット上の不安をおおる書き込みの真実をよく見極めもせず、人から人へその言葉は広がっていった。

インターネットの世界では、知らない人になら、どんなひどい言葉を使ってもいいと考える人がある。私は、そうした向こう側に存在しているわからない人達の話より、自分が調べ、信じるに値すると判断したことを自分の大切な人たちに伝えたい。

スマートホンの普及により、情報は、簡単に手に入るようになった。その分、何を信じ、何を疑うかは、個人の判断に任せられている。インターネットの情報の中には、皆が目を引くような見出しや言葉が並び、そのインパクトに根拠がどこにあるかよりも、早く誰

かに教えたいという気持ちがある。情報の信ぴょう性を疑うことなく、話題性が先にたち、根拠は誰も知らうとしない、その怖さこそが、今回のコロナウイルスという新たな感染症が広がった当初にも私たちを不安にさせた。日々、新たな情報が更新され、その情報が本当なのか調べようもない私は、あの時、ただただ不安の中にいたように思う。情報の取り扱い、本当に難しい。情報の根拠、信ぴょう性を調べようがない場合もあるが、私はできるだけ、他人を不安にする情報には疑いの目を向ける必要があるのではないかと考えるようになった。

今考えれば、いろいろな情報にとらわれず、自分で見聞きした情報をもとに考えて行動できる人になってほしいという思いがあつたから、母はまだスマホを持たせなかったのではないだろうか。

今のところ、私は、スマホを持っていない。調べたいことがあれば、もちろんインターネットで調べる。正しく理解し、正しく伝えること。自分と、自分の大切な人を守るため、このことは、これからも私の考えのもとになる。

コミュニケーションツールとして考えた時、私はやはり直接会って思いを伝えるようにしたい。なぜなら、話した人の意図や思いを他人が切り取ったり、付け足したり、書き換える恐れがあるからだ。

初めて会う人にはその人がどんな人なのかわからないうちは、互いに緊張するし、どこまで自分を見せてよいのか迷う。すぐに仲良くなれることもあれば、共通の体験を通して仲良くなることもある。その過程が、互いの距離を近くする。

「あの時、楽しかったな。」

「あの時は、どうして喧嘩をしたんだろう。」

と、思うようなこともある。スマートフォンの中だけの関係なら、つながりを断てば、済む。しかし、現実はどうはいかない。家族なら毎日顔を合わせるし、学級の友人なら教室に行けば会うことになる。自分の都合だけで一方的に関係を切ることは難しい。顔を合わせな

ければいけないことが、仲直りにつながることもある。手軽に関係を築き、簡単に関係を切ることができるスマホとは違う「難しさ」と「よさ」があるように思う。

スマホの便利さ、手軽さ、そして、その危うさを含め、コントロールできるようにしたい。そのときにもう一度母に言いたい、「私もスマホが欲しい。」